

『大島の歌集』 394番歌にみえる N \emptyset 形の解釈てなおし

まつもと ひろたけ

【要 旨】

奄美シマウタの歌詞にある…アリ ツイカバ ツिकासイのアリはヒト代名詞で、主格的でなく与格的にはたらいっている。

【キーワード】

奄美大島方言うたことば、N \emptyset 形、主格的、与格的

松本2007「琉球方言の主体—客体表現から」（未公開）で、奄美大島方言の格のマークのつかない N \emptyset 形をみていくさい、『大島の歌集』^註にてでくるつぎのシマウタをとりあげた。

・花の あやはびら あり つかば つかす。 おもかげば 残ち 別る しのき。

このシマウタには問題にしている N \emptyset 形がふたつある。あやはびら \emptyset 形、あり \emptyset 形のふたつである。松本2007では田畑千秋2007「奄美のウタ言葉の中の主格用法としての N \emptyset 形 『大島の歌集』より」（『国文学解釈と鑑賞』908）の解釈、「花のように美しい蝶〈愛する女性の形容〉に彼がついたならばつかせておこう／面影を残して別れるのがつらいことだ。…」を参考にして、あり \emptyset が主格的にはたらい、主体—主語をしめすとした。

もっとも、その時点からこれでいいかどうか、はっきりした理由はなかったものの気がかりだったので、蝶～あり（蟻）のような縁語関係などを想定して、あり \emptyset の主語としての地位を補強しようとしたが、ムシの「あり」はいまの方言ではアミ、アンで、アリや ar のようなかたちはきいたことがない。そこでアリのことをアリというのを、『大島の歌集』だけでなく現在のシマウタ歌詞にみえる、うたことばの本土文語語形へのちかより（うたことばに「たまる めず」のようなシヨル系の連体形でないスル系連体形があらわれるのと同様に）のひとつととてみたが、じもと出身の田畑の賛同をえられなかった。

その後、「彼がついたならば」という解釈は気にかかるのは、ヒト代名詞が主語になるとき、ふつうなら N \emptyset 形をとる例がみあたらないこととさしあうからではないかと気づいた。そのことには田畑2007でもふれていて、「…主格の場合、普通にはいつも格助辞〈が〉がともなって、〈アルイガ ツイカバツイカスイ…〉となる。」とある。一方、この歌詞にはもうひとつの N \emptyset 形、あやはびら \emptyset がある。だとすれば、あやはびら \emptyset を主格的にとつて、あり \emptyset を与格的にとらえた解釈もなりたつことになる。つまり、「はなのようにうつくしい蝶が、かのおとこにつくなら、つくまにせよ。とはいうものの、おもかげをのこしたままわかれるのがつらいことだ。」のようにカレガ蝶ニツクナラから蝶ガカレニツクナラへとひっくりかえすわけである。

与格的なN \emptyset は、主格的なN \emptyset とちがって、現在のシマユムタにも、ヤマカゼ イキヤティ モーリ シャンチドー (ハブにでっくわしてなくなったって)、サブロ カチュン ッチュヤ タルヨ (三郎にかつひとはだれね)、のようにふつうにでてくるし、ヒト代名詞も例外的なふるまいをしめさず、格のマークをおとした、アルイ マサリユン ッチュヤ ヲウラン (かれにまさるひとはいない)、のようなN \emptyset 形式が可能である。与格的なN \emptyset には現代方言ではヤマカゼのようなイキモノ名詞 (毒蛇ハブのいみな) もアルイのような代名詞もたつことを『大島の歌集』にあてはめると、あやはびら \emptyset も、あり \emptyset も与格的にとらえることができるから、あやはびら \emptyset でなく、あり \emptyset のほうをカレニとする解釈はここからもなりたつことになる。

また、田畑によると、方言の文構造では、述語動詞の直前の位置にくる名詞成分は、助辞をふりおとしてN \emptyset となる傾向があるという。このこともアリ ツイカバ ツイカスイのアリを与格的に解釈するのにつかうことができる。

前回報告後、このようにかんがえて、うえの別解を田畑に提示したところ、それをみとめてくれたうえ、シマびとからみると、蝶ガカレニツクナラのほうが蝶ニカレガツクナラよりシマびとの発想にあっている、ともつけくわえた。発想にあうという田畑の感覚はシマの歌謡をおおくみてきたことからくるものだろうが、その具体的な内容については、シマウタを点検しながらこれから確認していく必要がある。ともあれ、うえのように修正すると、言語的 (文法的) なよみがシマびとの感覚的な把握ともくいちがわなくなるようだということが、いまの時点であきらかにされたといえる。

□注) 『大島の歌集』 (仮称・未公刊) は明治のごく初期の成立とされる。

□参考文献 (本文にあげたものは省略)

松本泰丈・田畑千秋共編2012『奄美語研究ノート—内容類型学からみた奄美諸方言』 (大分大学教育福祉科学部田畑研究室)